

# 新宗谷館跡出土の土器・陶磁器・石製品の様相について

## —再整理と若干の考察—

岡本 健・山本尚人

### はじめに

同志社大学歴史資料館には、同志社大学京田辺キャンパス内に所在する中世城館跡である新宗谷館跡の出土遺物が保管されている。本資料群は同志社大学校地学術調査委員会による1980年の発掘調査で出土したものであるが、調査当時は諸般の事情により報告書の発行には至らず、長年未報告のままであった。しかし、本資料群の重要性を鑑みてこのたび歴史資料館で再整理を行うこととなり、その整理作業を岡本と山本が行った。本稿でその成果の一部を報告するものである。

### 1. 新宗谷館跡について (図1)

新宗谷館跡の地理的・歴史的環境については前稿<sup>1)</sup>で詳しく述べているため、本稿では前稿の成果に依拠して簡潔に述べる。

新宗谷館跡は京都府京田辺市多々羅中垣内に所在し、甘南備丘陵より南に派生した丘陵上に位置する。本遺跡が位置する谷筋は普賢寺谷と呼ばれ、北河内・大和方面へと抜ける街道が通過し、木津川沿いの南北ルートと宇治田原方面への東西ルートが交わることから、南山城地域の交通の要衝として機能してきた。

南北朝期、普賢寺谷に口駒ヶ谷遺跡などの城館が築かれ初めた。室町時代には、普賢寺川に沿って草路城・南山城・都谷館・新宗谷館・観音寺東館など多くの城館が存在し、河内と山城の国境には天王畑城が存在した。応仁・文明の乱に前後して南山城地域では多くの戦いが行われ、宝徳3年(1451)に守護畠山持国に背いた「普賢寺殿原」や、東軍として戦った粕氏、木津氏、田辺氏、井出別所氏ら国人衆が活躍した(『経覚私要鈔』・『大乘院寺社雑事記』)。乱後に成立した山城国一揆の際、中心になったのは彼ら国人衆と考えられ、普賢寺谷の城館群の主達も参画していたことが予想される。

戦国時代、永禄10年(1567)における松永久秀による普賢寺谷の焼き討ち(『沢蔵及松永乱記』)や、永禄12年(1569)の織田信長による普賢寺衆の滅亡(『多聞院日記』・『二条宴乗記』)など、動乱の舞台となる。『言継卿記』・『多聞院日記』には元亀2年(1571)に細川藤孝らが普賢寺へ出陣した記事や、同年に松永久秀が「普賢寺之城」に入城した記事が見られる。また、元亀4年(1573)榎島城の戦いで織田信長に敗れた足利義昭は普賢寺谷を経て河内若江城へ逃れており、天正10年(1582)本能寺の変の際には、堺に滞在中であった徳川家康が本国へ戻るために普賢寺谷を経て木津川を越えていることから普賢寺谷が交通の要衝であったことが窺える。江戸時代には普賢寺の多くの地域は淀藩領となっていたが、実際には多くに分割されており淀藩領以外には会津藩領や禁裏御領にも属していたことが分かっている。

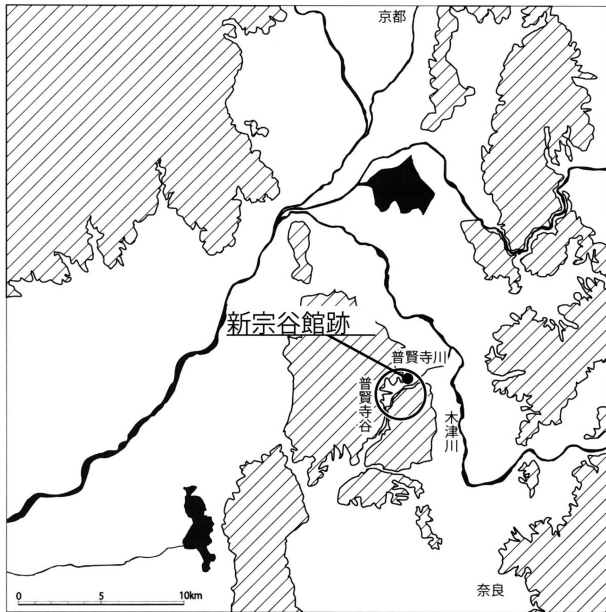


図1 普賢寺谷と新宗谷館跡の位置  
(注1文献に加筆)

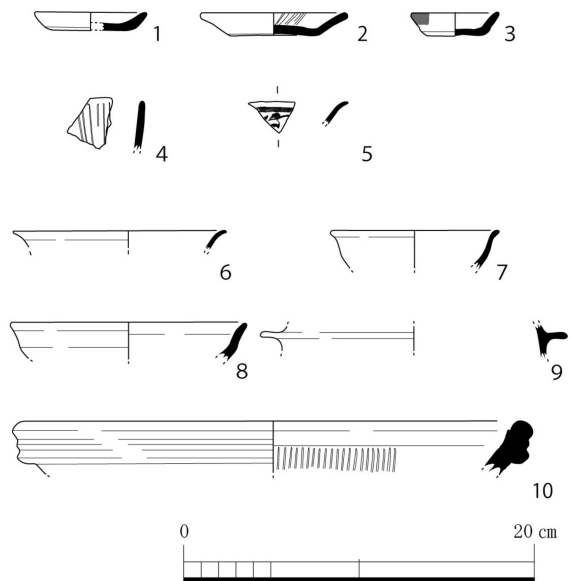


図2 新宗谷館跡V郭出土遺物 (S=1/4)

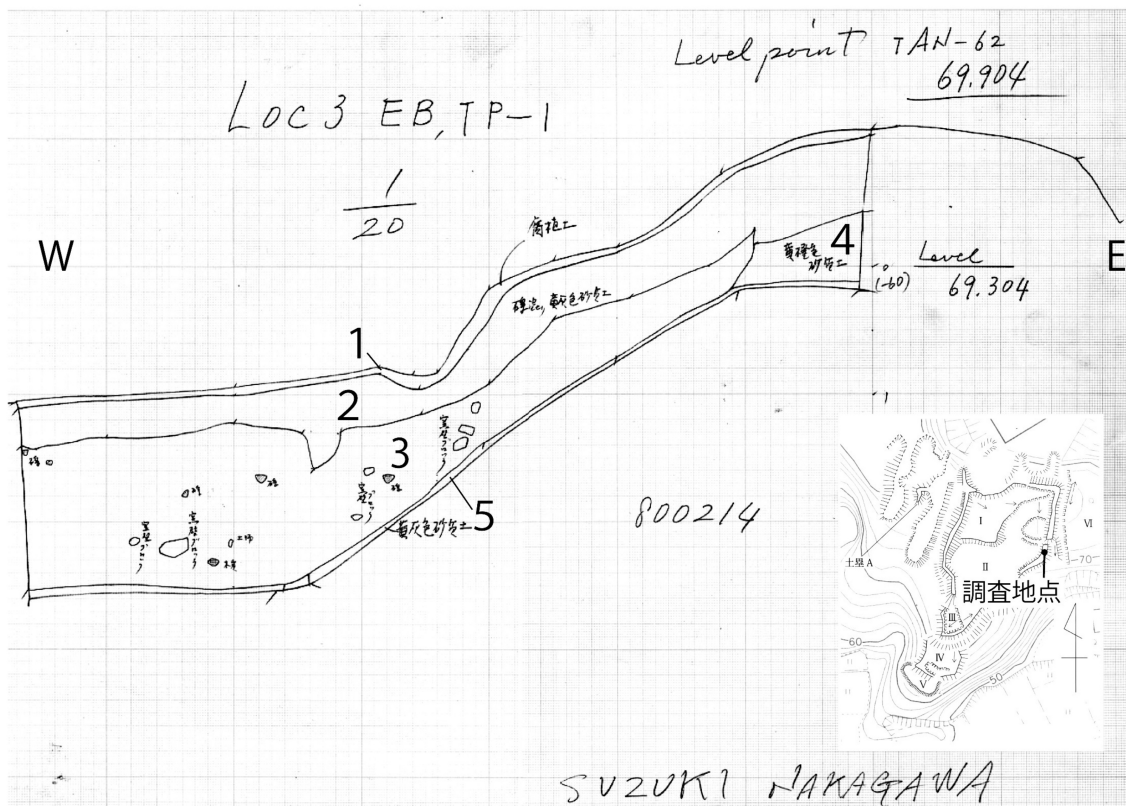


図3 調査地点と1980年当時の土層断面図  
(S=1/55、一部加筆・調査地点図は注1文献より引用縮尺任意)

## 2. 既往の調査 (図2)

1993年に新宗谷館跡のV郭の発掘調査が田辺町教育委員会によって行われている<sup>2)</sup>。その際に、土坑や多数のピットが検出されている。また、遺構面の上層では、中近世の遺物の細片を含み、平坦にならされた耕作土と考えられる層も確認されており、館の廃絶後の土地利用の様子が窺える。

ここでは、従来の未報告資料を含め、V郭から出土した遺物の様相を述べる。既に報告がなされているものとしては、12世紀後半に属する瓦器皿や瓦器椀、16世紀末に属する土師器皿や土師器小壺、唐津焼の折皿がある。その他に未報告のものとしては、1～10がある。1～3は土師器皿である。1は弱いヨコナデとユビオサエを施す。II郭で出土した土師器皿A-I型式(後述)に該当する。2は底部を若干押し上げ、体部口縁部が外反する。内面にはナデ上げを施す。奈良町分類<sup>3)</sup>A群(赤土器)の系譜に属しII郭のB-I型式(後述)に該当する。大和からの搬入品であると考えられる。3は焼成があまく、通常の土師器皿よりもろい。口縁に灯明皿に用いた痕跡を確認できる。4は青磁蓮弁文椀である。蓮弁が退化段階であり、上田分類<sup>4)</sup>のB-IV類に属す。15世紀後半に比定される。なお、この個体は被熱しており釉薬が部分的に剥げている。V郭で出土している遺物のうち、被熱が確認できるのはこの一点のみであり、II郭でも同様に被熱した青磁蓮弁文椀が出土していることから、より上位の郭から落下した可能性が考えられる。5は染付である。内面に唐草文が描かれている。小野分類<sup>5)</sup>のB<sub>1</sub>群に属す。16世紀に比定される。6と7は白磁皿であり、新垣・瀬戸分類<sup>6)</sup>のC類に属す。16世紀に比定される。8は瀬戸美濃の天目椀である。9は土師器の羽釜である。10は堺・明石の播鉢である。18世紀に比定される。

2003年の歴史資料館による調査ではII郭の北部にトレンチが設けられた。出土遺物としては、土師器皿片や玉取獅子が描かれた青花、白磁椀などごく少数である<sup>7)</sup>。

## 3. 1980年の調査の再整理 (図3)

調査は同志社大学校地学術調査委員会により行われた<sup>8)</sup>。以下、当時の調査担当者である鈴木重治氏への聞き取りと歴史資料館に残された記録(土層断面図と調査日誌)をもとに、1980年の発掘調査を再整理していく。

鈴木氏によれば、調査地点はII郭の東側に位置する土塁であり、土塁を垂直方向に断ち割るようにトレンチを設定した。歴史資料館に残されている土層断面図を参照すれば、土塁の西半分とその内側の平地を調査したと理解できる。鈴木氏によれば、今回報告する資料群が出土したのは土層断面図における3層からであり、調査当時は土塁構築時に埋納された一括資料と判断されたという。さらに、3層の最下面からは室町時代の和鏡が出土し、土塁構築時の祭祀に伴う遺物として理解したという<sup>9)</sup>。

## 4. 出土遺物 (図4～6、写真1～4)

新宗谷館II郭出土の遺物は、コンテナケース2箱分、破片で土器・陶磁器類は406点、石製品は4点、金属製品は14点である。本稿では、金属製品を除いた、図化・時期判別可能な遺物の一部を報告する。出土遺物の報告にあたり、輸入陶磁器は、青磁は上田秀夫、青花は小野正敏、白磁は瀬戸哲

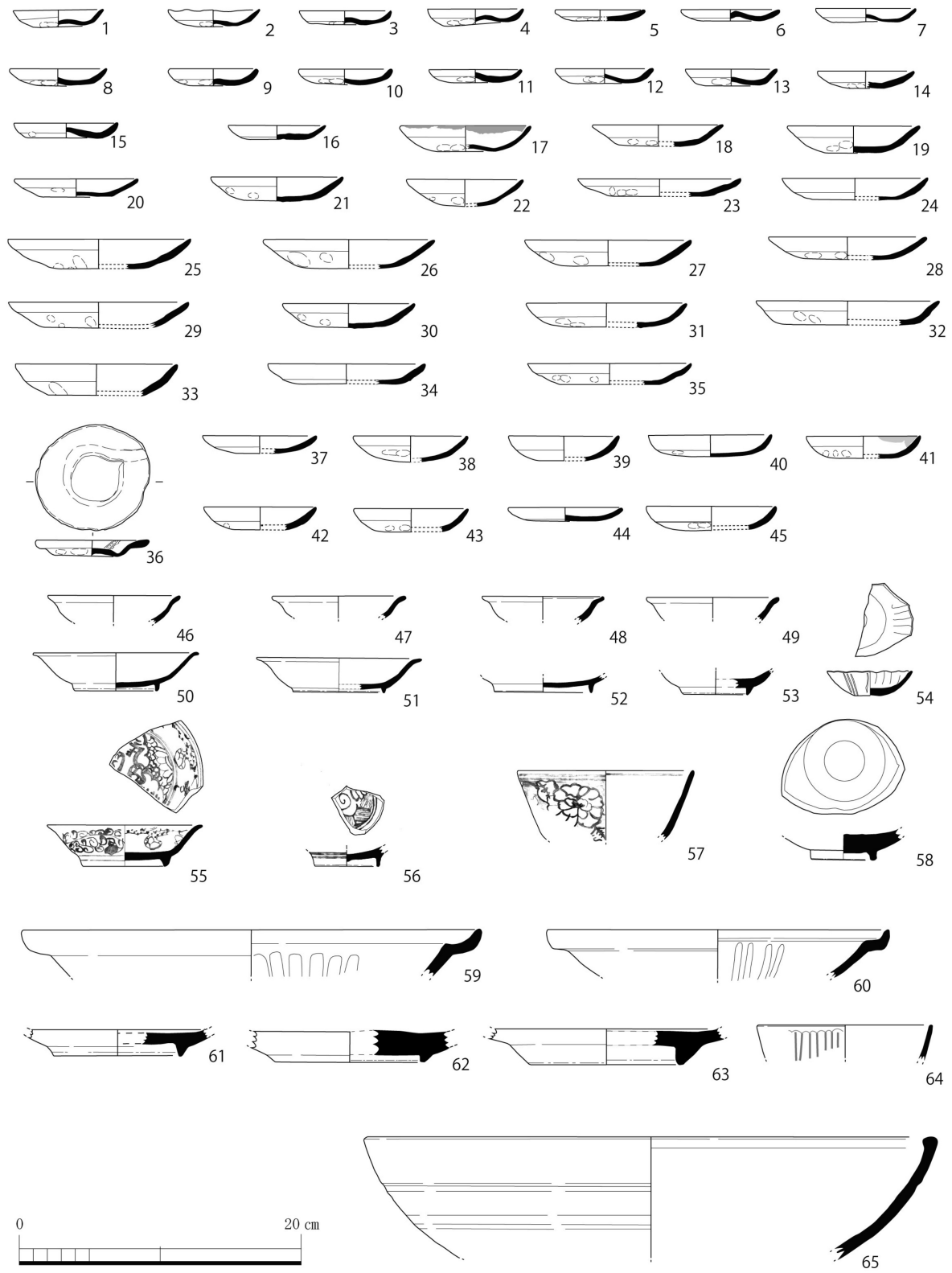


図4 新宗谷館跡Ⅱ郭出土 土師器皿・輸入陶磁器 (S=1/4)

也・新垣力の年代観を、国産陶器は、備前焼は重根弘和<sup>10)</sup>、信楽焼は畑中英二<sup>11)</sup>、瀬戸焼は藤澤良祐<sup>12)</sup>の年代観を、瓦質土器は佐藤重聖<sup>13)</sup>の年代観を参考にした。

#### (1) 土師器皿

新宗谷館跡の位置する南山城地域における土師器皿は研究蓄積が少ない。そこで、今後の調査・研究に資するように本報告では出土土師器皿の特徴をできるだけ詳細に記述する。さらに、年代や産地をできるだけ絞り込むように努める。

中井淳史氏により、当該地域（京田辺市域を含む宇治川以南の南山城地域）では、京都系土師器皿が存在せず、大和との共通性が強い土師器皿が多いということがすでに指摘されている<sup>14)</sup>。先行研究の成果を踏まえ、今回の報告にあたり当該地域における土師器皿の大まかな分類を以下のように行い、それをさらに細分していく。

A群：成形方法や調整は大和との共通性が強いが、法量や胎土などが微妙に異なるもの。新宗谷館跡の周辺の南山城地域に類例が存在するものを多く含む。

B群：成形方法・調整・法量・胎土などあらゆる点で大和と酷似しているもの。大和から搬入された土師器皿と推定される。

#### ①A群土師器皿

A-I型式（1～16） 口径は6～7cm程度で、器高は低い。底部がわずかにへこみ、体部が内湾し、口縁部は直立する。内面に明瞭なナデを施し、ナデ上げを行う個体が多い。ただし、内面のナデにはU字状ナデや「の」の字状ナデなどの多様性がある。灰白色の比較的精良な胎土である。今回報告する土師器皿の型式のうち数量が最も多く、16点出土している。小田垣内遺跡<sup>15)</sup>（京田辺市）や古屋敷遺跡<sup>16)</sup>（京田辺市）など、周辺の遺跡に類例がある。1は内面を「の」の字状にナデる。2は口縁部内面のヨコナデとナデ上げが連続しない。口縁部外面に灯明によるススがわずかに残存する。3はナデの痕跡が比較的不明瞭である。底部内面に一方向ナデを施す。4は内面をU字状にナデる。二次焼成により、部分的に黒く変色している。5は器高が低く、ナデが比較的不明瞭である。6は底部のへこみが底部の中心にこないという点で特殊な個体である。7は底部にU字状のナデを施す。10は全体的にナデが不明瞭であるが、ナデ上げ部分のみ明瞭である。15も全体的に黒ずんでおり、二次焼成を受けたものと思われる。16は全体的にいびつな形状をしているが、法量や胎土の特徴からA-I型式に含めることにした。

A-II型式（17） 口径は9cm程度。底部は平坦であり、体部は内湾し、口縁部は直立する。内面のナデは不明瞭であり、ナデ上げを行わない。断面が層状に剝離する。形状はB-II型式に類似するが、器壁が薄いことから別型式とした<sup>17)</sup>。1点のみの出土である。17は内面が黒く変色している。

A-III型式（18～22） 口径は9cm程度。底部は平坦であり、体部は直立気味に立ち上がる。口縁部は直立する。灰白色の比較的精良な胎土である。5点出土。18と19は内面のヨコナデの痕跡が非常に明瞭である。

A-IV型式（23～35） 口径は10～12cm程度。底部は平坦であり、体部、口縁部は直立する。灰白色の比較的精良な胎土である。13点出土。23は器高が比較的低く、体部がやや内湾したのち外反する。

31は底部外面にヘラ起こし痕が観察できる。34は外面のヨコナデ調整とユビオサエ調整との境界が非常に明瞭である。

## ②B群土師器皿

B-I型式(36) 底部を押し上げ、体部・口縁部は外反する。底部内面を強く「の」の字状になで、ナデ上げする。口縁部は肥厚し、全体的に扁平な形状である。奈良町分類のA群(砂粒を含む胎土であり、古代以来の「赤土器」の系譜を引くもの)に属し、16世紀後半の年代が与えられる。1点のみの出土である。大和では奈良町遺跡(奈良市)・古市城山遺跡<sup>18)</sup>(奈良市)に、南山城では古屋敷遺跡(京田辺市)・都谷館跡<sup>19)</sup>(京田辺市)・鹿背山城跡<sup>20)</sup>(木津川市)に類例がある。

B-II型式(37~45) 口径は8~9cm程度。底部は平坦であり、体部は内湾し、口縁部は直立する。内面のナデは不明瞭であり、ナデ上げを行わない。奈良町分類のC群(灰白色の精良な胎土の一群で、形態は比較的平坦な底部に直線的な口縁部がつく)に属する。9点出土している。大和では奈良町遺跡(奈良市)・古市城山遺跡(奈良市)に、南山城では飯岡横穴(京田辺市)に類例がある。40は二次焼成を受けており、外面に金属が付着する。44は全体的にゆがんだ形状である。

## (2) 輸入陶磁器(46~65、写真1、2)

46~49は白磁小皿である。新垣・瀬戸分類の景德鎮窯系C類に該当する。50~52は白磁皿である。端反り皿であり、畳付と高台内側は釉剥ぎを行う。新垣・瀬戸分類のC類に属す。16世紀に比定される。53は白磁碗の底部である。全面に施釉し、畳付の釉剥ぎを行う。新垣・瀬戸分類のC類に属す。16世紀に比定される。54は白磁菊花皿である。平底で底部外面を円形に釉剥ぎし、内面見込部は蛇の目状に釉剥ぎを行う。

55~57は青花である。55は高台を持つ端反り皿である。外面に界線と密な唐草文、内面にアラベスクと梵字が描かれ、畳付の釉剥ぎを行う。小野分類のB<sub>1</sub>類に属す。16世紀に比定される。56、57は染付碗である。56は外面に界線、内底に法螺貝文が描かれ、畳付の釉剥ぎを行う。沖縄出土青花分類のG群に属す。16世紀後半に比定される。57は外面に界線と白抜きの牡丹文、内面に界線が描かれている。類例に首里城跡(沖縄県)出土のものがある<sup>21)</sup>。15世紀後半~16世紀後半に比定される。58は施釉後、見込部分を蛇の目状に釉剥ぎし、畳付も釉剥ぎを行っている。青磁・白磁・青花いずれにも該当せず、詳細は不明である。

59、60は青磁盤である。内面に明瞭な蓮弁文が施されている。60は褐色の色調を呈す。15世紀前半。66~68は青磁盤の底部である。類例に至徳寺(上越市)出土のものがある<sup>22)</sup>。61、62は外底まで施釉後、畳付の釉剥ぎを行う。63は施釉後、高台部分内側および畳付の釉剥ぎを行う。64は青磁碗である。ヘラ描きによって、胴部に細線と剣頭が蓮弁の単位を意識した蓮弁文が施されているが、上田編年によると退化段階であるB-IV類に属す。15世紀後半に比定される。

65は鉢である。褐色の釉がかかり、体部外面に明瞭な沈線を有す。口縁の釉を剥ぎ、貝目やタタキが無く、底部が全面施釉という特徴を有す。中国産と想定される。輸入陶磁は二次焼成によって表面



写真1 輸入陶磁器



写真2 輸入陶磁器

が発泡している個体が確認できる。写真1、2は実測に耐えず、写真にて報告する輸入陶磁器類である。唐草文を描いた青花の体部1点、釉剥ぎが行われた底部付近1点。底部全面の釉剥ぎを行った青磁皿の底部1点、外面を段状に成形した青磁香炉の底部1点、外面に黒褐色の釉が施された耳付の壺の頸部を含む破片3点。耳付の壺の肩部1点。

### (3) 国産陶器 (66～75)

66は古瀬戸焼の瓶子である。外面と口縁部内面まで自然釉がかかる。藤澤編年の瓶子Ⅱ類後期Ⅱ期に属す。14世紀末～15世紀第1四半期に比定される。67は瀬戸美濃焼の天目椀である。口縁部付近のみの残存であるが形態から15世紀後半に比定される。68は信楽焼の壺である。口縁部の形態から畑中編年の2期中段階に属す。16世紀前半に比定される。69～71は備前焼の甕である。69は口縁部の玉縁の扁平化が進み、頸部が直立気味である。70、71は口縁帯が長く外面に凹線帯を形成し、外開きの特徴を有す。69は重根編年のⅣB類に属す。15世紀後半に比定される。70、71は重根編年のⅤA類に属す。16世紀前半に比定される。72は信楽焼の水指あるいは建水である。体部が外上方に開きながら立ち上がる。73は三筋壺である。形式的には12世紀頃のものに該当するが、つくりや胎土の観点から常滑には該当しない。口縁部の形態から、瓷器系、東海系いずれかの産地であると思われる。74は信楽焼の建水である。口縁部を内側に折り返してつまみ出し、直線的に立ち上がる体部をもつ。畑中編年の2期新段階古相に属す。16世紀後半に比定される。75は信楽焼の播鉢である。口縁部を外上方につまみ出し、内側に段をもつ。5条1単位の播目を持つ。内面底部付近の播目は使用により摩耗している。畑中編年の2期新段階古相に属す。16世紀後半に比定される。

### (4) 瓦質土器 (76～82)

76は小型浅鉢である。有脚で直に立ち上がる体部に、菊花文のスタンプを施す。底部外面にはケズリを施し、体部には縦方向のミガキの痕跡が残る。佐藤聖氏分類の小型浅鉢Ⅰ類に属す。16世紀第3四半期に比定される。77は土管である。粘土紐を積み上げて製作しており、口縁部が強く外反した後に内湾し、屈曲部にヨコナデを施す。佐藤氏分類の土管型土器Ⅱ類に属す。16世紀第3四半期に比定される。78は捏鉢である。外面のユビオサエが顕著で、内面は口縁端部付近まで横方向のヘラミガキを密に施す。79～81は播鉢である。79は6条1単位、80は10条1単位の播目を持つ。79、80は佐藤編年のE型式に属す。15世紀第3～16世紀第1四半期に比定される。81は10条1単位の播目を持つ。口縁部外面に強いナデを施し、口縁端部が外反する。内面は使用により摩耗している。佐藤編年のF型式に属す。15世紀第3～16世紀第3四半期に比定される。82は風炉である。口縁部外面及び底部外面に横方向のケズリを施す。口縁の受け部状の部分は粘土を貼り付けた上で内側に折り返して成形しており、ナデによって接合した痕跡が顕著である。類例として、本願寺境内(京都市)出土のものがある<sup>23)</sup>。瓦質土器は二次焼成を受けているものが大半を占め、赤みを帯びた色調を呈す。



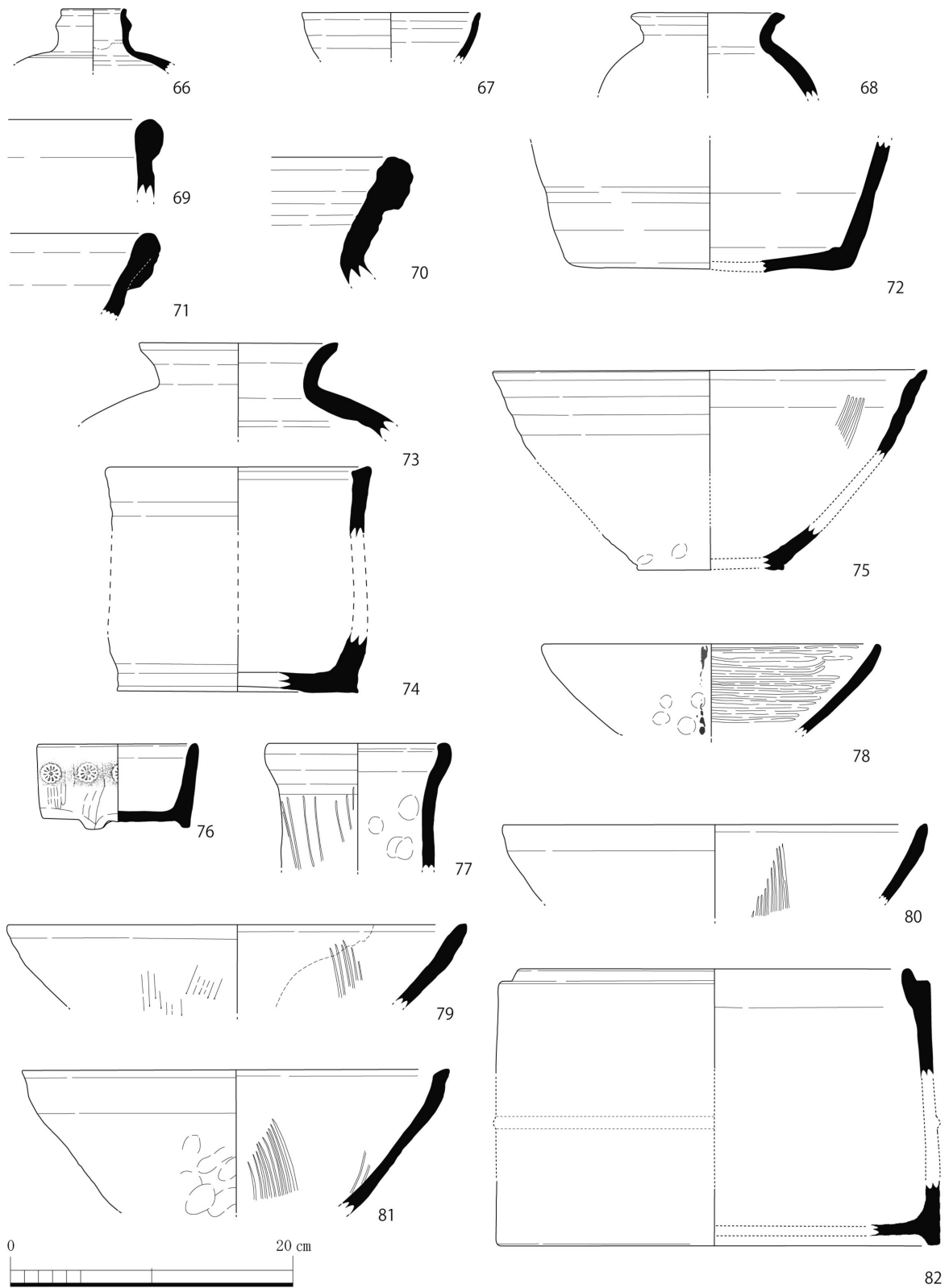


図5 新宗谷館跡Ⅱ郭出土 国産陶器・瓦質土器 (S=1/4)

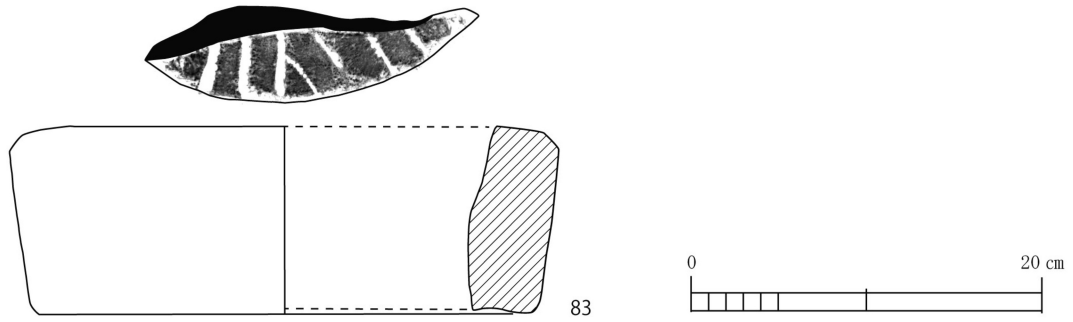


図6 新宗谷館跡II郭出土 石製品 (S= 1/4)



写真3 砥石 (表面)



写真4 砥石 (裏面)

## (5) その他 (83、写真3、4)

83は石臼である。花崗岩製。目のパターンは反時計回りの切線主溝形である。下臼であると思われる。目が使用により摩耗している。

写真3、4は砥石である。1は結晶片岩製である。残存長7.6cm、幅9.2cm、厚さ2.1cmの方形に成形されており、上下2面に擦痕が認められる。上面は縦方向と斜方向に筋状の凹みがある。背面は自然面に近い状態であるが、使用痕があり、斜方向に筋状の凹みがある。元々別の用途で用いられていたものが転用された可能性が考えられる。2は結晶片岩製である。成形の痕跡は見られない。上下2面に擦痕が認められる。上下2面ともに、縦方向の筋状の擦痕が認められる。3は泥岩製である。ひょうにきめが細かく、良質な砥石である。上下側面に擦痕が認められ、筋状の擦痕が平行に走っている。側面には縦方向と横方向の筋状の凹み、上面には横方向の凹みと縦方向と斜方向の筋状の凹み、下面には横方向の凹みがある。

## 5. 若干の考察

以下、新宗谷館跡から出土した遺物の様相に関して、少し考察を加えた。

## (1) 遺物組成の特徴

新宗谷館跡で最も広大な面積を有するII郭において、貯蔵具の甕や調理器具の播鉢、供膳具と位置づけられる陶磁器類が集中して出土し、また筆者らの現地調査の際、備前焼甕片が表採されていることなどからII郭に居住空間が存在していたことが考えられる。

出土した遺物の組成について、貯蔵具は備前焼、調理器具は信楽焼、瓦質製品といった器種ごとに産地の選択がなされていることが見て取れる。また、灯明皿としての使用を確認できる土師器皿が少なく、供膳具であったと推定される土師器皿、輸入陶磁器の椀・皿類が出土遺物の大半を占めている点が、II郭の組成の特徴といえるだろう。

新宗谷館の南端にあたるV郭の様相は、12世紀後半の瓦器椀および15世紀後半～16世紀の輸入陶磁器類、17～18世紀の遺物など大きく3つの時期に分かれている。この点で、15世紀後半～16世紀後半に遺物の時期がまとまっているII郭の様相と異なっている。この差異は、各郭の利用状況の差異を示していると考えられる。また、V郭から、供膳具と推定される輸入陶磁器の青磁椀・白磁皿・染付皿と共に、II郭では確認できない煮炊具である土師器の羽釜が出土している。これは、V郭が新宗谷館における炊事場であった可能性等、各郭の利用状況を検討する上でも重要な点である。

新宗谷館の資料は、当時広域流通をしていた備前焼や信楽焼、瀬戸焼などの主要な六古窯の製品に加え、奈良の土師器皿B群や京内での出土事例が少ない瓦質の播鉢、捏鉢、土管といった瓦質製品が搬入されており、京内よりもむしろ、大和国に近い土器の様相を呈す、15～16世紀の南山城地域における土器の様相の一端を示す資料群と評価することができる。

輸入陶磁器については、青磁蓮弁文椀や青磁盤、白磁端反皿など、新宗谷館が廃絶したと考えられる時期よりも古い、15世紀前半～16世紀にかけての遺物が多く、青花E群など16世紀後半の新宗谷館が廃絶した時期にあたる遺物が少ない。このような状況からは、青花E群などの新しい製品は、

新宗谷館の廃絶に伴う整理時に廃棄されずに持ち出された、あるいは新宗谷館の居住者が伝世した古い時期の輸入陶磁器を所持し続ける集団であった、現状出土していないなど様々な可能性が考えられる。

## (2) 出土遺物からみた新宗谷館の変遷

II郭から出土した遺物の年代はおおむね15世紀後半～16世紀後半に収まり、II郭の機能時期に相当すると考えられる。発掘調査が行われているのがII郭とV郭のみという状況のなかで、それらの成果を重く評価するならば、館の機能時期は15世紀後半～16世紀後半ということになる。この時期は1章で述べた普賢寺谷の国人衆が活動していたことが文献上で確認できる時期と一致する。

また、本資料群のほとんどが被熱しているという点は注目に値する。すなわち、資料群の下限である16世紀後半における新宗谷館の火災が推定できるのである。なお、永禄10年（1567）の松永久秀による普賢寺谷の焼き討ちや、永禄12年の（1569）の織田信長による普賢寺衆の滅亡など、16世紀中頃の普賢寺谷は動乱の時期にあった。新宗谷館の火災に関しても、これらの動乱との関わりの中で捉えるのが妥当であろう。

前述した発掘調査時の所見に基づけば、遺物の廃棄よりも後に土塁が築造されたということになり、土塁の築造は16世紀後半である。したがって、16世紀後半の軍事的緊張状態のなかで土塁が築造されたという推論が成り立つ。ただし、現在の土塁調査の水準から見れば、土層断面図からは遺物の廃棄時期と土塁の築造時期の前後関係を厳密に検討することは難しく<sup>24)</sup>、注意が必要である。

館の機能時期をさかのぼる数少ない遺物として、12世紀の三筋壺と、14世紀末から15世紀第1四半期の古瀬戸瓶子とがある。三筋壺は火葬墓に伴う蔵骨器としての使用が想定されることから、新宗谷館築造以前の当地には墓域が存在した可能性も考えられる。なお、付近の小田垣内遺跡や古市城跡は、墓域を城郭に改めて使用している例である。

館の廃絶後の遺物としては、耕作地などとしての後世の利用が確認できるV郭以外は、唐津や伊万里、その他の近世陶磁器類の出土及び表採が現状では確認出来ない。したがって、新宗谷館の廃絶は16世紀後半であり、一部に後世の土地利用がなされているものの、おおむね良好な形で遺構が残存していると言えよう。

## おわりに

新宗谷館跡の土器・陶磁器・石製品の事実報告ならびに、土器・陶磁器から推定される館の変遷の考察を行った。当該期の南山城地域における土器様相の研究は十分に進展しているとは決して言えない。他遺跡との比較を含めた検討が必要であり、今後の課題としたい。また、新宗谷遺跡からは今回報告した土器・陶磁器・石製品とともに金属製品（武具・銭貨など）の出土もある。それらに関しては、別稿を用意して報告する予定である。

土塁や郭の構築過程については、資料上の制約により検討の余地が残っている。今後の発掘調査の進展による再検討が望まれる。

本稿の執筆は3章・4章(1)・5章(2)を岡本が、1章・4章(2)～(5)・5章(1)を山本が担当し、2章は岡本・山本が共同で担当した。

## 謝辞

このような機会を与えてくださった歴史資料館の若林邦彦先生・浜中邦弘先生に感謝したい。また、下記の方々・機関からご指導やご協力をいただいた。あわせて感謝申し上げたい。(五十音順、敬称略)

赤澤徳明，綾部美輪，伊賀高弘，岡田健吾，尾野善裕，加藤雄太，北野隆亮，木村孝一郎，  
佐藤亜聖，佐藤 隆，鈴木重治，續伸一郎，中野晴久，新田和央，橋本久和，長谷川眞，  
畑中英二，原田憲二郎，平尾政幸，藤澤良祐，森島康雄，山口誠司，吉村幸広  
京田辺市教育部文化振興室 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
奈良市埋蔵文化財調査センター 日本中世土器研究会

## 註

- 1) 岡本 健・山本尚人・眞田拓弥 2017「京田辺市都谷城館群縄張り調査報告」『同志社考古』14、同志社大学考古学研究会
- 2) 鷹野一太郎ほか1994『新宗谷遺跡発掘調査概報』田辺町教育委員会
- 3) 中島和彦2014『南都出土中近世土器資料集』奈良市埋蔵文化財調査センター
- 4) 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会。
- 5) 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会。
- 6) 新垣 力・瀬戸哲也 2005「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 付.14～16世紀の青磁の様相整理メモ」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 7) 鋤柄俊夫 2004「平成15年度南山城総合学術調査」『同志社大学歴史資料館館報』第7号
- 8) 鈴木重治 1982「同志社校地出土の埋蔵文化財」『同志社時報』73
- 9) ただし、被熱した多量の土器を伴っていることから、祭祀というよりも廃棄として理解するのが妥当と思われる。土塁の築造に伴う祭祀として鏡を埋納する例は管見の限り見られない。
- 10) 重根弘和 2016「中世備前焼の分類と分布」『中近世陶磁器の考古学』第四巻 雄山閣
- 11) 畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 12) 藤澤良祐 2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』県史編さん室。
- 13) 佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会。同 2015「大和における瓦質土器播鉢の編年」『元興寺文化財研究所研究報告』2015 元興寺文化財研究所。
- 14) 中井淳史 1999「室町・戦国期における近畿地方の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』XIV、中世土器研究会。
- 15) 伊野近富1990「小田垣内遺跡」『京都府遺跡調査概報』第37冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 16) 大竹弘之ほか 1980『古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書 付載 飯岡東原古墳発掘調査報告書』田辺町教育委員会
- 17) 元興寺文化財研究所の佐藤亜聖氏に資料を実見していただいた際、層状に剝離する土師器皿は奈良にも存在するが、奈良の資料と比較して器壁が薄いという点で異なるという教示を受けた。

- 18) 森下恵介ほか1981「古市城跡」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』奈良市教育員会
- 19) 鈴木重治・松藤和人編 1977『京都府田辺町都谷中世館跡—同志社大学田辺校地内所在遺跡の発掘調査報告 I—』同志社大学校地学術調査委員会
- 20) 永澤拓志 2011「鹿背山城跡—寺から城へ—」『第18回京都府埋蔵文化財研究会資料集「地域史のなかの中世城郭』京都府埋蔵文化財研究会
- 21) 新垣 力 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 22) 鶴巻康志ほか2003『上越市史叢書 考古：中・近世資料』No.8 上越市
- 23) 近藤奈央 2008『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所
- 24) 図3の土層断面図に従えば、地山と認識された5層が土塁状に高まっていることになるが、そのような自然地形が存在したとは考えにくい。盛土の単位などを地山と認識している可能性がある。